

「利尻山」登山

日 時 2002年6月7日(金) 午前5時~午後2時

場 所 利尻山(1721m)

参加委員 鈴木健司(隊長)、田中清治(副隊長)、上田直樹、佐和洋亮

報告者 佐 和 洋 亮

6月6日(木) 利尻島調査班4名は、稚内港で、本隊の礼文島調査班と別れ、利尻島鷺泊(おしどまり)行きのフェリーに乗る。

やがて、雪溪の残る利尻山が、雲に見え隠れして舳先の浪しぶきの先に姿を現す。明日の天気が思いやられる。「浜の家ヤスタ」泊。(夕食、鈴木隊長の誕生祝いをする。)

6月7日(金) 薄曇り 風やや強し。朝食と昼食2食分のおにぎりを宿のおかあさんに用意してもらい、明け方5時(といっても、島の夜明けは3時半頃)宿の支配人の自称「裁判官」に、2合目の登山口「北麓野営場」まで送ってもらう。「風が強いから無理するな、頂上近くの岩場の下には何体もの白骨がある！」などとやや大げさな注意。

この山は洋上の独立峰。0メートルから登れる珍しい山。海に足を浸けて、め一杯の高度を登る人もいるが、今回は、目的が登山ではなく調査なので途中からだ。

<5時30分> 登山開始。さすが、日本百名山のスタートの山。登山ツアーが何組もいる。(我が隊は、上田隊員のおかげで、決して、中高年登山隊ではない!)

簡易舗装の道をたどると、程なく3合目の名水「甘露泉水」に着く。「日本百名水」のひとつとか。百名山の百名水とは、少し出来すぎの感があるが、火山の堆積物と樹林帯がフィルターになって、雨や雪が十分に浄化された伏流水がこんこんと湧き出している。その名のとうり、甘くてうまい。

ここから先は水はない。他の登山者といっしょに、水筒にいっぱい補給。

しばらく、針葉樹林帯のゆるやかな上りが続く。

<6時25分> 4合目。倒れた大木に腰掛けて、朝飯のおにぎりをひとつほうばる。シャケのハラス、たらこ、つけもの、のり、それにおしぼりまで、ちゃんと2食分が分けて包んであり、宿のおかあさんの心配りがうれしい。(後で聞いたところによると、この方は東京のご出身で、島でも評判の漁名人で男前の漁業のご主人と縁あったのだそうだ。)

<7時35分> 6合目見晴台。5合目までは、トドマツ、エゾマツの深い森林帯の中を行き、やがて、灌木の樹林帯に入る。

登山道は良く整備されている。登山者が多い割には、登山道が荒れていない。本州の山と異なり、登山者が夏季だけに集中しているせいだと思われる。

白い小さい花弁が連なって天を指しているような花の群生に出会う。「マイズルソウ」と、花に詳しい田中隊員の説明。広がった葉を羽に見たてて、鶴が舞っている姿に似てい

るから。

眼下には、雲の切れ間に鷺泊の港と町が望める。礼文水道の向こうの、本隊がいる礼文島は霞んで見えない。

海岸線に沿って、緑の島にコンクリートのラインが半周している。「サイクリング専用道路」。これは全く余計なもの。「知らないうちに突然出来た」という話も聞いた。景観を損なうし、実際、利用者はあまりなく、お年寄りのリハビリの散歩などに使われているとか。つい、「ホッカイドウ」「リトウ」「コウキョウコウジ」とくれば、アノカタを連想してしまう。

ジグザグを登る度に、樹木はいつそう背を低くし、代わりに、白、黄色、紫の高山植物の群れに出会う。(さすがの田中隊員もすぐには名前が思い出せないのもある。後で、私は自分で撮った写真を図鑑と照らし合わせてみた)。

小さい白い蝶が舞ったようなのは「オオバナノユンレイソウ」。白い花卉が5枚の真ん丸いのは「オロムイイチゴ」。黄色のが小さく遠慮そうに咲いているのは「キバナノコマノツメ」。地面に埋まるようにひっそり咲く紫は「アイヌタチツボスミレ」(この他にも何種類ものスミレがある)。

他にもいろんな花があったが、高山植物だけに集中できなかった訳がある。登るごとに、ガスが出てきて視界を遮り、樹木も少なくなって強風をもろに受けることになり、だんだんと(中高年登山には)きつい上りとなった。

< 8時40分 > 8合目「長官山」(1218m)に着く。昭和の初め頃、おおいに肥満の北海道長官が、やっとさこまで登ったので(「ワシャもうここから上には行けん。ここを頂上としてワシの名を付けよ」と言われたかどうかは定かではないが)この名が付いたとのこと。

視界が急に開けて、ふところに大きく雪渓を抱いた利尻山の頂上が間の当りに見える。強風が西から東に尾根を横切り、それが作る雲が尾根を渦巻いて、駆け抜けては消える。今そこにあった頂上が次ぎの瞬間には、灰白色の雲に覆われる。少しは不安もよぎるが、ま近に頂上を見たことで、気を入れ直す。「頂上まで2時間の行程」と、朝食の残りのおにぎりをほおばって元気をつけた。

ここからは、樹林帯はなく、わずかに残るハイマツに風をよけながら、9合目直下の避難小屋を目指す。

< 利尻山避難小屋 > かつて登ったことのある朝倉委員から、この避難小屋周辺のジンプン公害(黄害)の調査を指摘されていた。

小屋は先客で満員。登山ツアーの人が多く、ガイドを除けば、ほとんどが「元娘さん」隊。装備に関しては完璧。

早速、周辺を調査する。小屋の周囲は、灌木と草原の僅かの平地がある。人が用を足す場所はここを置いてはない。

よく見ると、あちこちに変色した紙状のものがある。そして、その一帯だけ、妙にあでやかな青紫のスミレのような花が、勢いよく群生している。人工の栄養を与えられて、特別に生育がいいのか。

後で図鑑とこの時の写真を照らし合わせてみた。ぴったり当てはまるものがない。スミレの変種かもしれない。とりあえず、リシリノグソムラサキと名づけておこう。

そういえば、酸性雨がもたらす窒素酸化物が肥料となり、本来環境の厳しい場所に生育する高山植物が栄養を与えられて、生態系に異常をきたしているということを聞いた。

人間のもたらす肥料、はもっと大きな影響を与えていることが予想される。

< 9時30分 > 9合目。急に樹木の姿が消え、急勾配となる。西側は急なガレ場。下から雨混じりの風が吹き付ける。体が浮いて飛ばされそうになる。地を這うようにして頂上をなをも目指す。

風雨はますます強く、雲の中で視界は5メートルぐらい。足をふんばって耐えていると、上から人が下りて来る。天気が悪化する前に登頂したそう。上の岩場はずべるし、分岐点も風を遮るものがなく、下山もかなり骨をおったとのこと。

この時点で「合議」。退却に賛成2、反対1、保留1。最後は鈴木隊長の断で登頂を断念。

時に10時35分。沓形コースとの分岐点直前、高度1550m付近。

< 下山 > 下り始めると、私達が途中で追い抜いた他のグループと行き違える。30数人のツアーなどは、体力差でかなりバラけており、末尾の方の婦人は「ワタシもうここで待っていたい」と悲壮な様子。「八甲田山雪中行軍」の映画を思い出す。

避難小屋で、昼食のおにぎりを食べていると、どやどやと、先ほどの方達が、やはり登頂をあきらめたらしく、しずくを垂らして入って来る。また、小屋は満員。ほうほうの態で場所を譲る。「あまり、山に肥やしをやらんでくれよ」と願いつつ、下山再開。

突然、下腹あたりが、キュウツときた。そういえば、今朝は起きてすぐ飛び出し、激しい運動して、おにぎり4つつ詰め込んだから、そろそろシタまで降りてきても不思議ではない。

ヨワッタナ！環境委員が、この名山を汚す訳にはいかない。仕方がない。トイレのある麓まで、さあ、逃げ、イソゲ！！

完